

## 令和2年度の始まりに当たって



### 【はじめに】

令和元年度は、『利用者に光をあてる（共に寄り添う）かかわり合う力』の育成を施設経営として位置づけし推進してきた。その結果、各職員の声かけや相談活動等を通して、利用者も感動や喜びを体験しながら満足したやりがいのある活動の取り組みへ変容を見せている。

今年度の夏前には新作業も完成し、新しい体制も整えなければなりません。『同じ航路も初航路』といつも話しているように年度の始まりが大事です。各職員が現在の状況を把握すると共に、「自分自身がどんな職員になりたいのか」「どんな職場を作りたいのか」ということを考えることも大切です。「利用者にとって本当に心地よい場所」を目指し、ふれあいの里の一員として、利用者支援や施設運営上の基本理念として継続して実践化を図っていくものであることを理解し、各々の特性を活かしての取り組みを期待したい。

### 【令和2年度を迎えるに当たって】

令和元年度の生産活動を反省を活かし、今年度へ向けて現状・改善・課題の観点から、どの部門も計画しているかと思えます。予算と事業は表裏一体的なもので、事業を起すということは予算が必要であり、その範囲内で効率的に運用するという事です。先ずチェックすることは、令和2年度予算がどのように策定されているかを再度しっかりと把握しておくことです。

どの事業でも昨年と同じではなく、経営理念にもある「成果基盤型」を意識して、一事業一改善という立場を大事にして、気分を新たに（初心に戻って）業務に当たってください。

現状を観ると、利用者は毎日黙々とタイムスケジュールに従い、生産活動に取り組んでいる姿をみると頭の下がる思いである。年始や令和2年度に向けて目標を立てて取り組んでいるが、ただ一生懸命に生産活動へ取り組む利用者であったり、何気なく淡々と活動したりと、この中でどれだけの利用者が目的意識をもって取り組んでいるのか疑問である。登所間もない利用者であればそれでも良いかもしれないが、ただ言葉だけの目標だけで、本来の目標を見失ってしまっている。生産活動を通して技術を磨くだけでなく、どんなときにも諦めないやり抜く力であったり、仲間とのコミュニケーションの場や協力し合える人間関係であったり、意欲を奮い立たせるような学ぶべき場を設定していくことが求められる。

また、利用者の QOL（生活の質）を考えたときに、「その人がその人らしい人生を生きていけるように」「人生を楽しみながら生きていけるように」職員一人ひとり取り組むべきであり、そのことが利用者にとって「生きる力」となり、やさしさや楽しさ、喜び等を自分で表現し体感できる「豊かな心」もてるよう利用者へ寄り添い支援してもらいたい。

### 【言葉遣いを考える】

近年、ほとんどの障害者・介護施設等は、「利用者」の呼び方について「〇〇さん」と「さん付け」で呼ぶように徹底されてきている。これまで利用者について、権利擁護や虐待防止法での障害者に対する接し方・呼称など数々の研修でも取りだたせているが、「〇〇ちゃん」や「あだ名」「呼び捨て」は人権侵害であるという見方から「さん付け」の方が望ましいと考えている人が増えてきている。介護や障害者施設の現場というのは、ある意味では究極の接客業といえるのかもしれない。当施設でも呼び捨てにあたる言い方ではなく、利用者に対して「さん付け」に切り替えることでしぜんと丁寧な言い回しを心がけるようになって、そして、「より利用者へ寄り添い、より利用者にとって快適さを感じられる声かけ」が出来るようになるのではないだろうか。

### 【安全・健康管理について】

コロナウィルスの影響もあり、外出する機会も減っていることから体がなまっている利用者も多いようです。作業時間や休み時間等を利用して適度に体を動かしていきましょう。うがい手洗いについては、声かけや見守り確認等を行いながら引き続き徹底した指導をお願いします。また、季節の変わり目で心身不安定な利用者も出てくると思いますので、目配り等も併せてお願いします。

また、送迎車の運転については、スピードの出し過ぎやよそ見運転等交通ルールを厳守した運転をお願いします。送迎車には、施設名もあるので施設の看板を背負って走行しているという自覚をもって運転をお願いします。